

## 第 2 9 回

# 西洋社会科学古典資料講習会

2009年11月10日(火)～13日(金)

一橋大学社会科学古典資料センター

# 講 義 日 程

## 第1日 11月10日(火)

9:10～9:30 オリエンテーション

- ①② 9:40～10:30, **書誌学 (I)** 武者小路 信和  
10:40～11:30 記述書誌を“読む”面白さ：  
図書館員のための書誌学入門 大東文化大学文学部准教授
- ③④ 13:00～13:50, **書誌学 (I)** 武者小路 信和  
14:00～14:50 記述書誌を“読む”面白さ：  
図書館員のための書誌学入門 大東文化大学文学部准教授
- ⑤⑥ 15:10～16:00, **保存・修復 (I)** 増田 勝彦  
16:10～17:00 紙資料の保存 昭和女子大学大学院  
生活機構研究科教授

懇親会(17:15～19:00)：希望者のみ

## 第2日 11月11日(水)

附属図書館見学(9:00～9:30)：希望者のみ

- ①② 9:40～10:30, **古典研究 (I)** 栗田 啓子  
10:40～11:30 19世紀末フランスにおける「社会経済」  
の思想と実践 東京女子大学教養学部教授
- ③④ 13:00～13:50, **保存・修復 (II)** 岡本 幸治  
14:00～14:50 歴史的製本の修理と保存の基礎技術 製本家・書籍修復家
- ⑤⑥ 15:10～16:00, 社会科学古典資料センター見学(書庫・所蔵資料・貴重書保存修復工房)  
16:10～17:00

### 第3日 11月12日(木)

- ①② 9:40～10:30, **古典研究(Ⅱ)** 野村 真理  
10:40～11:30 ヨーロッパ・ユダヤ人の言語経験 : 金沢大学経済学経営学系教授  
棄てられた言語、選ばれた言語、  
再生された言語
- ③④ 13:00～13:50, **書誌学(Ⅱ)** 洪 恒夫  
14:00～14:50 展示、その役割と力 東京大学総合研究博物館  
特任教授
- ⑤⑥ 15:10～16:00, **書誌学(Ⅲ)** 床井 啓太郎  
16:10～17:00 古版本の目録作成 一橋大学社会科学  
古典資料センター専門助手

### 第4日 11月13日(金)

- ①② 9:40～10:30, **古典研究(Ⅲ)** 平井 俊顕  
10:40～11:30 戦間期イギリスの経済学 : 上智大学経済学部教授  
いくつかの文書を踏まえつつ
- ③④ 13:00～13:50, **書誌学(Ⅳ)** 名和 賢美  
14:00～14:50 日欧におけるギリシア古典受容史 : 高崎経済大学経済学部講師  
ヘロドトス『歴史』を例に
- 15:00～15:30 修了式

## 記述書誌を“読む”面白さ ―図書館員のための書誌学入門―

大東文化大学文学部准教授

武者小路 信和

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、所蔵する古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業的主导・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向かなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？インターネットで<本文>を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本)と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A.J. West. *The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios.* (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を 82 点 (現存するものの 1/3 以上) 所蔵しており、次いで明星大学の 11 点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。

たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books*

*Beyond Their Texts*. By David Pearson.(London: British Library, 2008)において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に持つ個性（たとえばブックデザイン、来歴・書き込み、製本など）を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。（読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本です。）この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約30年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』（1543）の初版と第2版約600冊の現物調査（とくに書き込みの調査）を行いました[Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566)*. (Leiden: Brill, 2002)]. この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』（早川書房2005）では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する資料に直接あたる研究方法は、数は少なくとも、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

古典資料がもつ個性、本文（テキスト）、製本、来歴(provenance)など、印刷・出版・造本に関わる「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が必要です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列挙（分類）書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」（山下浩）としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果（書誌類・論文など）を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンス

を楽しめばよい、といえるかもしれません。(図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。)

今回は、(書誌学の研究成果を活用するために必要な) 書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎 (Ⅰ) : 本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎 (Ⅱ) : 記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎 (Ⅲ) : 印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に上げる予定です。

「本の仕立て」(その本がどのような折り丁によって構成されているか)は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、(理想本について記録した)記述書誌\*と比較・照合することによって、その本が

- ①どんな本であるのか(著者、出版者、出版年など)
- ②どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか(他のコピーとの関係)
- ③完全なコピーであるのか(本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか)

といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

\*図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本(ideal copy : 市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本)の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との(交流や諍い・いざこざを含む)関係などを知ることができだけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

- ・高野彰『洋書の話』増補版（丸善 1995）

記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。

- ・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009) 書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。

なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS) のサイト <http://www.rarebookschool.org/tanselle/> から無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）

- ・書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker. が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB) のサイト <http://www.ilab.org/services/abcforbookcollectors.php> から無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）

本書（第六版）の邦訳：『西洋書誌学入門』（図書出版社 1994）（ビブリオフィル叢書）

- ・書誌学・古典資料関連の web サイトの入り口としては、私のサイト「The Biblio Kids!」 <http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid> に「泰西古典資料 リンク」のページがあります。

# 紙資料の保存

昭和女子大学大学院生活機構研究科教授

増田 勝彦

## 目次

- 1.紙自身に内在する劣化要因
- 2.環境に依存する劣化要因
- 3.劣化予防対策の考え方と実施

### 1.紙自身に内在する劣化要因

紙自体および紙中に存在する物質、酵素によって生起する自己分解

#### 1-1.砕木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

<対策>→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

#### 1-2.酸性サイジング処理紙

##### 1-2-1.酸性物質(明礬(カキ礬)、硫酸アルミニウムなど)

①セルロースを加水分解し、結晶化を促す

②紙への添加物として

##### ②-1 明礬

: 中国の表具師は糊に明礬を入れる(明時代の書籍の劣化)

\*芥子園画伝(1701): 絹の場合 膠 1.5%、明礬 0.6%

: 日本画家は、膠に明礬を混ぜてドーサとし、紙に塗布する

\*狩野派の法: 紙の場合 膠 2.1%、明礬 1%

\*本間良助「日本画を描く人のための秘伝集」昭和8年5月、厚生閣書店

: 西洋の15-16世紀の紙でも明礬は膠と共に使われていた

\*マイエンヌの手記(1631):

紙に水3ガロン、膠1ポンド、明礬2.5ポンド(水に対して膠3.3%、明礬8.3%)

\*森田恒之「画材の博物誌」昭和61年6月、中央公論美術出版

##### ②-2 硫酸アルミニウム

: 木材パルプ紙のしみ止め用ロジンの繊維への定着剤として添加される

<対策>→酸性度の測定

湿式 中性紙チェックペン、pHメータ

乾式 小谷尚子「非破壊方法による書籍資料の酸性度乾式測定方法の検討」

第28回文化財保存修復学会大会、2006

→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム ( $\text{CaCO}_3$ )、重炭酸マグネシウム ( $\text{MgHCO}_3$ )

但し、明礬添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

→「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学32,pp78-75

→「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学32,pp70-77

### 1-2-2.触媒 (金属イオン)

①酸化反応を促進する (インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青)

②黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

<対策>→酸性を緩和する処置

### 1-3.保存・修復材料

①セロテープ類による汚損・変形

<対策>→有機溶剤による除去

②漂白剤 (漂白中、残留漂白剤による)

<対策>→外観の向上を図るだけの漂白を避ける

→見難い文字を見易くさせるときのみ行なう

→修復家と討議

## 2.環境に依存する劣化要因

### 2-1.生物環境

虫害とカビ害 (温度、湿度が高いと発生しやすい)

#### 2-1-1.虫害

<対策>燻蒸、I P M \*補足-2を参照

#### 2-1-2.黴害

(黴の生育範囲)

①褐色斑点(フォクシング)→乾性の黴

②黒色・赤色・青色の黴→湿性の黴

<対策>→保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水

→普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる

→防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

## 2-2.生物以外の環境

### 2-2-1.温度と湿度

①温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

②含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる（過乾燥）

③温度湿度の変化による紙の伸縮

④温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

<対策>→書庫・収蔵庫の温度湿度管理

設計による省エネ型収蔵庫、

温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置

→木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ

### 2-2-2.汚染空気

a)環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用

汚染大気から→ 亜硫酸ガス ( $\text{SO}_2$ ) 硫酸になる可能性

窒素酸化物 ( $\text{NOX}$ ) 硝酸になる可能性

オゾン、酸素など

<対策>→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム( $\text{CaCO}_3$ ), 重炭酸マグネシウム( $\text{MgHCO}_3$ )

→アルカリ性物質を含む紙で包む

\* 補足-1 を参照

<対策>→収納箱によるシェルター カイルラッパー

→「容器に入れる—紙資料のための保存技術」、図書館協会

b)環境材料から放出される物質による

b-1.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

<対策>→内装木材の場合は、ハترون紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2.アルカリ性物質

- ①染料を変色させる→浮世絵
- ②写真の乳剤に影響
- ③絹を劣化させる
- ④アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

<対策>→コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆う

アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

<対策>→中性の紙に包む

2-2-3.紫外線その他の光

a)光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

- ①可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

<対策>→紫外線除去フィルターの使用

→光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200 \text{日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100 \text{日} = 80,000\text{Lux}/\text{年}$

（ギャリー・トムソン著、「博物館の環境管理」に記されている例）

博物館・美術館における展示照明の推奨照度（村上隆「文化財のための保存科学入門」）

資料	ICOM（1977）推奨値	IESNA（1987）推奨値	照明学会（1999）推奨値
光に非常に敏感な資料（1）	50lxでできれば低い方がよい （色温度約900K）	50lx	50lx （1日8時間、年300日で積算照度120,000lx/h）
光に比較的敏感な資料（2）	150～180lx （色温度約4,000K）	75lx （1日8時間、年300日で積算照度180,000lx/h）	150lx （1日8時間、年300日で積算照度360,000lx/h）

光に敏感ではない資料（3）	特に制限なし ただし300lxを超えた照明を行う必要はほとんどない (色温度約4,000～6,500K)	特に制限なし 実際には展示照明効果と輻射熱を考慮する必要がある	500lx
---------------	--	------------------------------------	-------

ICOM：国際博物館会議      IESNA：北米照明学会

- (1) 染織品・衣装・死°スリー・水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙  
・染色した皮革製品・自然史関係標本
- (2) 油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革製品・骨角・象牙・木製品・漆器
- (3) 金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・ステンドグラス
- lx：ルクス、照度      K：ケルビン、絶対温度

#### 2-2-4.用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

①書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

<対策>→現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管

注意深く丁寧な取扱

②閲覧による紙の疲労

<対策>→調査・研究時だけの保護策

#### 2-2-5.災害

①水害（水害を受ける可能性は予想以上に高い）

\*火災時の消化水

\*台風・集中豪雨時に浸水だけでなく壁・天井からの水漏れ

\*配管の故障による水漏れは意外な場所が被害を受ける

<対策>→水を被った文書は、まずポリ袋に入れて出来るだけ小分けにし、

急速に凍結乾燥させる（凍結乾燥装置）

一度に処理できる量をあらかじめ調べておく

→急速凍結のほうがよいが、なければ家庭用冷凍庫でもよい。

その時には、利用できる冷凍庫の存在を確認しておく。家庭用冷凍庫を

使用する時は解凍後吸い取り紙で徐々に乾燥させる

## 2-3.収蔵用材

### 2-3-1.碎木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

＜対策＞→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

### 2-3-2.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

＜対策＞→内装木材の場合は、ハترون紙などの被覆でも樹脂吸着に効果  
樹脂の少ない材を使用する(桐、杉の白太など)

### 2-3-3.アルカリ性が極めて高い紙(残留木灰を多く含む和紙)に包む危険性

＜対策＞→中性の紙に包む

## 3.劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財の寿命」

### 修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要はあるか。

図書館・文書館における環境管理(シリーズ本を残す8) 稲葉政満著 2001.5

IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則(シリーズ本を残す9) エドワード・P.アドコック編、国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7

# 19世紀末フランスにおける「社会経済」の思想と実践

東京女子大学教養学部教授

栗田 啓子

はじめに

19世紀末から20世紀に至る世紀転換期の文献資料を「古典」と位置づけることができるかどうか、については、議論の分かれるところかもしれない。しかし、新たな概念を構築するための準拠枠として参照される文献資料を「古典」と定義するならば、時代的限定を超えた古典研究もありうるのではないだろうか。ここでは、そのような考えに基づき、社会主義体制が崩壊し、市場経済至上主義が席卷するようになった20世紀末に、「第三の道」を模索する中で注目を集めた「社会経済」という概念のフランスにおける原点を探ることにしたい。

## 1 「社会経済」の誕生

19世紀半ば以降、産業化の進展と共に出現した社会問題（「社会的貧困」や労働問題など）に対応するために、フランス経済学は古典派的枠組みを超えて、「社会経済（*économie sociale*）」という新しい視角を持つようになった。この「社会経済」の特徴は、理論と実践の両面から経済統治のあり方を変革しようとした点にある。

「理論としての社会経済」は、1896年に出版されたL. ワルラス（*Léon Walras*:1834-1910）の論文集『社会経済研究』に代表されるように、純粹理論では扱うことのできない経済的正義を分析基準とする経済学の一分野とみなすことができる。しかし、それにとどまらず、1856年に「社会経済協会」を設立したル・プレ（*Frédéric Le Play*:1806-82）とその学派に見られるように、既成の経済学の領域を社会学などの隣接諸分野と融合させようとする試みも存在した。

「実践としての社会経済」も、理論と同様に、多彩な顔を持っている。大別すれば、若きワルラスが参加し、シャルル・ジッド（*Charles Gide*:1847-1932）が生涯を賭けて追求した協同組合運動のように、市場外の経済活動の〈場〉としての「社会経済」と、企業と政府の双方に社会問題の解決を働きかけ、政策的提言を行う〈運動体〉としての「社会経済」の二つに整理することができる。

本報告では、上で名前を挙げたワルラスとジッド、そしてル・プレの流れを汲むエンジニア・エコノミストのエミール・シェイソン（*Emile Cheysson*:1836-1910）とクレマン・コルソン（*Clément Colson*:1853-1939）を主要な登場人物として、「社会経済」の理論と実践の多様な姿を提示し、古典派経済学との分岐点を探ることにしたい。

具体的には、1) 19世紀末の社会問題の実相を確認した上で、それぞれの経済学者の「社会経済」概念を比較検討する。ここでは、古典派経済学との距離を検討の基準とすることから、19世紀末の経済学者たちが本来の「古典」をどのように読んだのか、ということにも触れる予定である。つぎに、2) 「実践としての社会経済」について、19世紀末から多大な関心を集めるようになった人口問題と労働者の住宅問題を取り上げることによって、「社会的貧困」の捉え方の変化を明らかにし、社会問題に対する政策的提言を検討する。最後に、3) 「社会経済」の理論と実践を総括しながら、「社会経済」の主張に含まれる「官」と「民」の対立と協同のあり方を明らかにすることを通じて、世紀転換期フランスにおける経済統治の新しい姿を浮き彫りにすることができればと考えている。

## 2 多様な「社会経済」概念

ワルラスが経済学を「純粋経済学」、「応用経済学」、そして「社会経済学」に3分類したのは周知のことである。「所有と課税のより良い条件の研究、あるいは富の再分配の理論、これらは私がとくに社会経済と呼ぶものでもある」(Walras, *Etudes d'économie sociale*, 1896) というように、彼にとって、「社会経済」とは市場経済の原理を探求する「純粋経済学」と並ぶ経済学の一分野と定義されており、分析対象が所有と課税の問題に限定されていることが特徴になっている。

これに対して、シェイソンの「社会経済」概念は、「社会経済あるいは社会学」と社会学と等値しているように、曖昧な部分を残している。しかし、「経済学はこの巨大な樹木の一つの枝にすぎない」(Cheysson, “le cadre, l'objet et la méthode de l'économie politique”) と文章を続けていることから、経済学の上位概念として「社会経済」を位置づけ、分析対象は社会全体に及んでいると言える。

ジッドになると、経済学は「純粋経済学」と同義であり、それとは明瞭に区別されるものとして「社会経済」が置かれている。さらに、「社会経済は人々の幸福を保障することを自然法則の自由な動きに委ねることは決してしない。反対に、一定の正義の考え方に合致する、自発的で十分に検討され、かつ合理的な組織の必要性を信ずるものである」(Gide, *Les institutions de progrès sociale*) というように、社会の組織化が強調されている。

## 3 「社会経済」の実践と政策提言

社会問題への対応として「社会経済」が誕生したことを考えれば当然とも言えるが、シェイソンやジッドの「社会経済」概念が示しているように、「社会経済」は実践活動を抜きにして語るができない。とくに人口問題と住宅問題は「社会的貧困」を象徴する事柄として重視された。

### 3-1 人口問題

人口問題に対する意識変化の淵源は 1871 年の普仏戦争の敗北にまで遡ることができる。パリコミューンの経験と共に、この敗戦はフランスの支配層内部に大きな動揺をもたらすことになった。人口減少は国力の衰退をもたらすと考えられ、敗北の主要な原因とする見方さえ現れた。経済学の分野でも、この歴史的な出来事以降、現代的にいえば、「少子化」が重要な社会問題として浮上してきたように見える。そのような流れのなかで、19 世紀を通じて労働者の貧困をもたらす原因のひとつとして人口増加を嫌うマルサス主義が支配的だったフランスにおいて、世紀末には、1896 年に「フランスの人口増加のための国民連合」が創立されるように、人口増加主義への転換が起こった。この古典的な人口観からの転換の背景には、社会経済学者たちによる、子どもを持つメリットとデメリットに関する人口の費用便益分析と呼びうる内容の理論の展開と、その理論に基づいた人口政策の提唱が存在したのである。

### 3-2 住宅問題

一方、住宅問題を見るならば、すでに 19 世紀半ばから、工業化とそれに伴う都市化の進展の結果として、下層労働者の劣悪な住環境が問題視されてきていた。もっとも、この住宅問題への対応は、2 月革命以前は「博愛主義的な」都市地主や不動産業者に委ねられていたにすぎない。だが、世紀転換期には、住宅問題が個人の責任に還元できない社会的貧困のひとつの現れとして捉えられるようになり、快適な労働者住宅の必要性が強く意識され始める。このような意識変化のなかで 1889 年に設立された「低廉住宅のための国民協会」の活動は、1894 年 11 月 30 日の法律、すなわち協会の会長の名前をとってシーグフリード法と呼ばれる住宅法に結実した。この法律は第 2 帝政期の政府主導による労働者住宅建設という施策を大きく変更し、住宅建設を完全に民間部門に委ねるという方針を打ち出していった。その結果、労働者住宅建設のための株式会社や、遅れて協同組合が組織されることになったのである。

経済思想史研究の面から興味深いことは、この人口と住宅をめぐる現実の問題において、理論上の原則的な違いを超えて、さまざまな学派の経済学者が協同していることである。しかし、住宅問題が社会経済学者たちの最重要課題のひとつだったことは、1900 年のパリ万国博覧会において、シャルル・ジッドが指揮した「社会経済」部門の重要な展示として住宅が取り上げられていることにも示されている。

おわりに

本報告では、①社会問題への対応としての「社会経済」概念の多様性を示し、②その出発点から、「社会経済」が実践活動を必要としてきたことを論じてきた。そして、③その実践活動において、市場に信頼を置く古典派経済学と自らを分ける社会経済学者たちが社会の組織化の必要性を主張しながらも、その一方で、政府への期待と警戒を併せ持っていたことを紹介した。それゆえに彼らは、市場と政府のすき間を埋めるものとして、家族を含むアソシエーションに期待を寄せたのである。報告では、この点をさらに掘り下げ、世紀転換期におけるフランスの経済統治のあり方に対する新しい構想を検討し、「第三の道」の可能性を考察することにした。

## 歴史的製本の修理と保存の基礎技術

製本家・書籍修復家  
岡本 幸治

西洋古典資料は、テキストの重要性は勿論のことだが、歴史的形態が大切な場合がある。折丁構成におけるページ差し替えの有無やブランクページの存在、刷りや版の違いが書誌的に重要な意味を持つ場合がある。出版形態や製本がテキストの社会的評価と結びついて意味を持つことがある。著者や所蔵者による献辞やメモ、線引き、蔵書票なども重要である。

このような形態的特徴は時代的背景や資料の来歴を表していて興味深いものがあるが、利用と保存にとっては問題が多い。製本は画一的でなく一点ごとに構造や機能、装丁材料が異なっていることが多い。表紙がはずれる、表紙の革が傷んでいる、見返しが切れている、綴じが傷んでいる、本の開きが悪い、ページが破れている、ページがとれている、ページが変色している、虫やカビの害がある、などの問題が発生する。そのままでは利用できない、または利用することで更に破損が進む恐れのある場合がある。問題が顕在化していない場合を含めて、所蔵する西洋古典資料全体の現在と将来に渡る利用を組織的に保証するために、計画化された効率の良い修理や保存の手段が必要とされる。修理と保存の手段には資料への働きかけ方の様々なレベルがある。資料への働きかけが強まれば、資料の原状に変更が生じる可能性が高まる。実際にどのような作業を行うのかは、破損状況だけではなく資料価値、利用頻度、代替利用の可能性、予算規模などを勘案して保存政策の中で決定される。

資料に直接に働きかけない手段としては、保存環境の調節と管理、蔵書調査、メディア変換、保存容器の作製、災害対策プログラムの作成、などがある。直接資料に働きかける手段としては、本のクリーニング、ページや見返し、表紙などを修理する小規模修理、もう少し専門的な製本構造の修理、再製本、革劣化対策作業、虫害対策作業、脱酸作業などがある。

### 保存環境の調節と管理

温・湿度の管理(温度、湿度とも調整、フィルター、結露など)、蛍光灯の紫外線対策、ホコリ(持ち込まない、溜めない、清掃する)、

カビ／虫害(IPM 管理)

### 蔵書調査

調査票の作成(蔵書構成と調査目標による)

蔵書の形態(製本構造と材料や書誌的情報などを記録)

劣化状態(劣化の現状、数量化、記録化)

記録を分析して潜在的な保存ニーズを把握する

利用頻度、資料価値などを併せて検討することで作業の優先順位を設定

## メディア変換

資料の利用媒体の変換－酸性化資料など脆弱な素材の資料の利用を促進

アクセスの制限、原資料の保存

メディア変換作業に必要な修理、保管環境の向上

## 保存容器の作製

大量の作業が可能

様々な種類の保存容器(保存環境の向上／物理的保護、配架、展示、閲覧などに利用)

作業の記録化が重要

## 災害対策

災害・火災・事故など緊急時の対策をたてる。連絡先、優先順位の設定。

## 本のクリーニング

刷毛、ワイピング・クロス、吸塵機、掃除機などを使用

カビの除去－HEPA フィルター装着の掃除機

## 小規模補修

館内で作業可能なものがある

ページ修理(和紙とでんぷん糊、粘着テープは使わない)

見返しの修理(糊をさす、和紙で修理、寒冷紗などで修理)

背表紙の修理(クータの利用、和紙で修理、クロスや革で修理)

## 製本構造の修理

専門家に委託、仕様を話し合う(健全な構造、良質の材料)

寒冷紗、クータなどによる背の修理

とじの修理

表紙ジョイントの修理など

## 再製本

館内で一部可能

仕様を話し合う(健全な構造、良質の材料)

薄い本や仮綴じ本など

## 革劣化対策

館内作業が可能、判断は慎重に

HPC(ヒドロキシ・プロピル・セルロース)の1,5%アルコール溶液

良質の保革油とコーティング剤(SC6000)

## 虫害対策

定期的点検

冷凍処理など

発生時の連絡先(文化財虫害研究所、エフシージー総合研究所、東京文化財研究所)、

## 脱酸作業

ブックキーパー法(プリザベーション・テクノロジーズ・ジャパン)

(DAE)乾式アンモニア・酸化エチレン法(日本ファイリング)

書籍の修理と保存に必要な専門的知識は傷んだ資料の回復に適用されるばかりではない。資料に引き起こされる傷みは形態や構造に起因するものであり、利用によってどのような負荷が発生するのかを指摘することができる。材料の劣化も構造・機能による負荷を経て顕現化するものである。資料を利用することで、どのような負荷が発生し、構造と材料にどのような影響を与える可能性があるのか、現在発生している損傷や欠落・変異などが、そのままにしておけば進行して憂慮すべき段階へと進行するのかどうか、現在の利用頻度、利用方法で今後も安全に使い続けることが出来るのかなど、今後の保存方法を検討する上で修復に関する専門的知識と経験を役立てることができる。また可能な限り資料に変更を加えずに効果的な修理を行う手段を提案することができる。書籍の修理と保存の技術は予防的保存の技術としても有効である。

## 参考文献

『防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアルー』

(日本図書館協会 2005年)

『西洋製本図鑑』

(ジュゼップ・カンブラス著 市川恵里訳 岡本幸治日本語版監修 雄松堂出版 2008年)

『資料保存の調査と計画』

(安江明夫監修 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 日本図書館協会 2009年)

『博物館・美術館の生物学－カビ・害虫対策のための IPM の実践』

(川上裕司・杉山真紀子著 雄山閣 2009年)

## ヨーロッパ・ユダヤ人の言語経験

—棄てられた言語、選ばれた言語、再生された言語—

金沢大学経済学経営学系教授

野村 真理

はじめに

近現代のドイツ社会思想史で活躍したユダヤ人は少なくありません。『資本論』のマルクス、『パサージュ論』のベンヤミン、精神分析学のフロイト、あるいは文学まで対象を広げれば、ハイネやカフカなど、図書館で彼らの著作の1冊や2冊は、手に取られたことがおありでしょう。

彼らはみなドイツ語でものを書いた人々です。しかし、ユダヤ人がドイツ語で著作することは、はたして、それほど自明なことだったのでしょうか。というのも、18世紀末にいたるまで、ドイツのユダヤ人の話し言葉は、イディッシュ語というユダヤ人のあいだでしか通じない言葉だったからです。しかし、このように言うと、ユダヤ人の言葉はヘブライ語ではないのかと、首をかしげる方もいらっしゃると思います。現に、イスラエルのユダヤ人が話している言葉はヘブライ語です。いったい、ドイツのユダヤ人において、ドイツ語とイディッシュ語、ヘブライ語の関係はどうなっているのでしょうか。

このたびの私の講義では、ドイツのユダヤ人思想家の思想そのものには立ち入らず、彼らのドイツ語の著作がユダヤ人の言葉の歴史のなかでどのような位置にあるのか、をお話したいと思います。

### 1. ドイツ・ユダヤ人の経験

はじめにヘブライ語とイディッシュ語の関係について言えば、ヘブライ語は、確かに古代パレスチナでユダヤ人によって話され、旧約聖書に書き留められた言葉でした。

しかし、紀元1世紀から2世紀にかけて、ユダヤ人がパレスチナを出て、当時ローマ帝国の支配が及んだ北アフリカから西ヨーロッパへと離散する過程で、ヘブライ語は話し言葉の機能を完全に失います。かわりに、ドイツ語圏に移住したユダヤ人のあいだで10世紀前後に誕生したといわれる話し言葉がイディッシュ語です。イディッシュ語は、文法や語彙や発音はドイツ語に似ており、ユダヤ・ドイツ語とも呼ばれますが、決定的な違いは、ヘブライ文字を用い、右から左に横書きされることです。

他方でヘブライ語は、話し言葉ではなくなりますが、言語として死滅したわけではありません。聖書のヘブライ語は、ユダヤ人のあいだで、ユダヤ教の経典や研究の言葉として学ばれ、継承されます。この学術言語としてのヘブライ語と話し言葉としてのイディッシュ語の関係は、中世ヨーロッパのラテン語とドイツ語やフランス語の関

係と似ています。

これが、ほぼ 18 世紀末にいたるまで、ドイツのユダヤ人の言語状況だったのですが、なぜドイツ語の大海のなかにあつて、ユダヤ人は別の言語を維持することが可能だったのでしょうか。

これには、キリスト教ヨーロッパ世界でユダヤ人が置かれた状況が関係しています。キリスト教を信仰しないユダヤ人は、法律の上では、原則的に外国人の集団として扱われました。そして、国家や自治都市の為政者は、集団としてのユダヤ人に対し、彼らの居住地や経済活動の範囲を差別的に定める一方、言語も含めて、ユダヤ人社会内部の問題は彼らの自治に委ね、干渉しなかったのです。

では、なぜ 19 世紀のドイツで、イディッシュ語は消えたのでしょうか。イディッシュ語の維持が、ユダヤ人が集団的に別扱いされていたことの結果であったとすれば、すでに答えはおわかりかもしれません。ドイツは、フランス革命によって誕生した近代フランス国家をモデルとして自国の近代化を進めます。その結果ユダヤ人は、個人としてユダヤ教信仰の自由を認められ、キリスト教を信仰するドイツ人と同じ法の下で平等になるのですが、このような形でのユダヤ人のドイツ国家への統合は、ユダヤ人が集団として持っていた独自の言語や風俗習慣を棄て、ドイツ人多数者の社会に同化することとセットでした。このユダヤ人の差別からの解放とドイツへの同化、統合の過程で、イディッシュ語はユダヤ人から「棄てられた言語」となり、ドイツ語が彼らに「選ばれた言語」となったのです。最初に何人かドイツのユダヤ人の名前をあげましたが、ちょうど詩人ハイネ（1797–1856）の母親あたりが、ドイツのユダヤ人がイディッシュ語からドイツ語へと移行する過渡期の世代であったようです。

## 2. 東欧ユダヤ人の経験

現在ではイスラエルというユダヤ人が建国した国家があり、イスラエルの公用語はヘブライ語とアラビア語です。では、いったん話し言葉の機能を失ったヘブライ語が、いかにして近代国家の国語として「再生」することが可能だったのでしょうか。

これを知るためには、東欧のユダヤ人の状況を知る必要があります。日本ではあまり紹介されていませんが、第二次世界大戦前夜のヨーロッパで、ドイツより西に位置する国に住むユダヤ人は 100 万人に達しなかったのに対し、ドイツより東のポーランドやソ連のヨーロッパ地域その他には、約 800 万人ものユダヤ人が住んでいました。そして、この東欧では、20 世紀はじめまでユダヤ人の解放が遅れ、ユダヤ人が被差別少数民族集団のまとまりを保ち続けたこともあつて、イディッシュ語は、第二次世界大戦当時もなおユダヤ人の生きた話し言葉であり続けていました。19 世紀のドイツで、イディッシュ語がユダヤ人自身によって放棄されたのとは大きな違いです。

それどころか、19 世紀に入って、東欧の諸民族のあいだで民族意識が高まると、ユダヤ人もその影響を受けて自分たちの言語に着目し、近代イディッシュ文学運動が起こると同時に、ヘブライ語を近代的な話し言葉として復活させようという近代ヘブライ文学運動も始まります。このヘブライ語の近代化と話し言葉としての再生、普及に

において最も功績があったのが、ベン・イエフーダ（1858－1922）というリトアニア生まれのユダヤ人言語学者です。

### 3. 消えた言語・再生された言語

ところが、ここにいたって、ユダヤ人のあいだで深刻な対立が発生します。つまり、イディッシュ語とヘブライ語と、どちらがユダヤ人の民族言語なのかという対立です。

ユダヤ人の民族運動というと、シオニズム——ユダヤ人発祥の地であるパレスチナに帰り、そこにユダヤ人国家を建設しようという運動——しか知られていないかもしれません。しかし、東欧のユダヤ人には、シオニズムに反対し、あくまでも現在の居住国でユダヤ民族の政治的、文化的自治権を求めようとする運動も存在しました。たとえばブンド（リトアニア・ポーランド・ロシア全ユダヤ人労働者同盟）という社会主義的な理想を掲げる組織は、その運動の代表です。ブンドは、イディッシュ語こそユダヤ人の民族言語だと主張し、それぞれの居住国でユダヤ人がイディッシュ語で教育を受ける権利を求めました。他方、ヘブライ語こそユダヤ人の民族言語であり、将来パレスチナに建設されるべきユダヤ国家の国語はヘブライ語だ、と主張したのがシオニストでした。

では、この対立の結末はどうなったのか。

ホロコースト（ナチ・ドイツによるユダヤ人迫害をさす歴史用語）という言葉をお聞きになったことがあると思いますが、ホロコーストで殺されたユダヤ人の数は、推定 600 万人といわれます。そして、この 600 万人の主たる部分は、東欧のイディッシュ語を話すユダヤ人でした。つまり、東欧のイディッシュ語は、ヒトラーによって、それを話す人もろとも消されてしまったのです。これによって、ブンドが夢見たような、東ヨーロッパでユダヤ人のイディッシュ語による文化的自治を実現しようという可能性も失われました。他方で、第二次世界大戦後、シオニストによって建国されたイスラエルで国語として採用されたのは、ヘブライ語でした。

イディッシュ語は、ついに「西洋社会科学古典」の言語とはなりません。しかし、イディッシュ語は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、小説や、歌、演劇、映画等の口語芸術の分野で味わい深い作品を数多く生み出しました。講義では、イディッシュ語の歌を聞いてみることにします。

# 展示、その役割と力

東京大学総合研究博物館特任教授

洪 恒夫

## 1. 展示という言葉の意味

「展示」を辞書で引くと、「(スル) 美術品・商品などを並べて一般に公開すること。(辞書：大辞林)」と記されている。また、その語源について、「ディスプレイの世界 (社団法人日本ディスプレイデザイン協会発行)」の中では、以下のような内容の記述がある。「展示」は漢字の「展」と「示」の字の組み合わせであるが、「展」はレンガの下にものを敷き、その上に人が腰かける状況を示し、下に敷かれたものを「のぼす」ことを意味するようになった。また“示”は神に捧げものを置く台を模った文字である。すなわち「ひろげてしめす」のが「展示」である。そして、展示という言葉が英語で表すなら、「Display」ということになり、「Display」の語源を辿ってみると、ラテン語の「dis-plicare」にいきつく。その意味は、折たたむの反対、つまり「たたんだものをひらく」である。そのことから表に出す、あらわに見せる、みせびらかす、並べる、広げるの意味になり「人目をひくように形や配置を考えた上で (公衆に) 見せること」つまり陳列・展覧。展示へと意味が拡大した。このように展示とは、内に秘めているもの、隠れているものを外に出したり、外に向けて示すことの意味をもっている。

ところで博物館やミュージアムでは「展示」とはどのような意味で使われているのだろうか。一般に博物館は4つの機能で構成されるといわれている。それは、「収集・保管」、「調査・研究」、「展示」、「普及・啓発」である。そして、「展示」はその機能の一つに位置づけられている。一つのケースとして、博物館の活動においては、次のような流れが想定される。まずは試資料を収集し、保管することで活動の資源を確保する。それらを分類・整理し、「調査・研究」することで標本の価値を創出する。そして、それらを展示や展覧会の企画を通して「展示」として公開し、展示活動等を介しながら教育や「普及・啓発」を行うという流れである。展示に使われる資料、標本は、通常収蔵庫などのバックヤードに収められており、表にはあらわれない。展示という博物館活動があって初めて隠れたところから外部に露出することになる。つまり、「展示」が行われるということ自体が仮に単純に陳列しただけであっても、先に記した、「ひろげてしめす」ことになり、「人目をひくように形や配置を考えた上で (公衆に) 見せること」になるのである。

## 2.博物館の「展示」

博物館の「展示」の役割や性格は、いつも変わらぬものなのであろうか。それを考える上で、時代の移り変わりによる「博物館」そのものの性格のうつり変わりに注目したい。展示は博物館自体の変遷にも影響を受けながら変化してきているとあってよい。博物館の世代の変遷については諸説あるが、ここでは伊藤寿朗氏の世代の分類を参考にしながら、それぞれの世代における展示の性格について考えたい。氏の分類では、第一世代の博物館とは「宝もの」の「保存」志向の施設であり、日常生活と乖離した別世界という性格のものが中心の博物館である。展示は常設展示のみで、単品の価値中心の展示内容が多く、調査・研究は行わない。展示方法も陳列、列品することが主流とされている。これは、主（あるじ）が権力、財力を活かして集めた品々を権力の象徴として公開することが目的となっているものも多い。収集においては確固たる理念もなく、その活動は学芸とは無縁のものが多く、孤立的であり、悠々自適の運営が特徴とされている。これに続く第二世代は、「公開」志向の施設である。コレクションの寄贈・公開が利用形態の一過性の見学が来館者との関わりとなっているものが多く、調査・研究は行われるものの、学芸員の個人的な興味と関心の範囲で行われ、展示中心の公開施設とされている。テーマ中心の展示内容で、啓蒙的なアピールが中心の運営が特徴であり、博物館に集められた標本、資料、資源は学芸員によって、教育に資するものとして活用されるが、ここでは、いわば館側の論理で活動が行われ、博物館に対する世間の無関心に嘆き、一方的な情報の発信が主流の施設である。これに続く第三世代は「参加」志向の施設であり、参加・体験を軸とする博物館である。市民の継続的な活用を前提とした、地域社会の要請により設立される市民の学習能力を育むことを目指すもので、既存の知識を普及するのではなく、市民自身が主体となって取り組むことが基本となる。展示も参加・体験の要素が加わり、資料の多様な見せ方を可能にする観察力の育成を目指した工夫がある。対社会的メッセージの発信が運営の機軸とされている。

このように「展示」は博物館など、それらが置かれた施設の使命、位置づけなどによっても、求められる役割や性格が違ってくる。前項でも述べたように、何かを並べるだけでも「展示」となるが、狙いや目的を十分考慮し、その情報伝達効果を如何なく発揮するものを目指してつくられた展示も、同じく「展示」なのである。博物館の世代分類についても、どちらがよくて、どちらが悪いということはない。また、現在はすべて第三世代の博物館であって、展示もそれに相応しいものでなければならないというものでもない。要は求められる施設のあり方、そしてそれに合った展示をその効果を期待しながら創ることが望まれるのである。では、展示にはどんな力があり、効果を生み出すことが可能なのかを、大学博物館での実験展示の実例を題材に紹介する。

### 3. コミュニケーションメディアとしての展示

これまで述べてきたように、「展示」は何らかの目的を持って、他に向かって掲示したり、メッセージを発する行為である。展示物を見せるだけのものもあれば、展示物の解説を施す程度にとどまるものもある。しかしながら、目的を明快にした上で、その実現を狙った情報の発信、伝達を実践するならば、展示は訴求力を持った情報コミュニケーションのメディアとなる。同じく情報コミュニケーションを行うメディアは他にも、書籍、映画・映像、演劇、等々数多ある。展示が他のメディアと異なる点は、物、文字情報、映像、光、など様々な要素が組み合わさり訴えかけてくる複合メディアであることである。そして、何よりも、展示物という触れられるリアルな媒体が介在するコミュニケーションが可能であること、また、それらを受け止める主体（観覧者）は自らが空間の中を移動し、実体験するメディアであることなどがあげられる。したがって、作り手の工夫次第ではこれらの要素をうまく操ることで、他では成しえない情報伝達を実現させることが可能となる。

今般、紹介する展示は、展示の企画・デザインを専門とする私が、人類学者の諏訪氏（東京大学総合研究博物館教授）と協働で企画・製作した東京大学総合研究博物館の特別展「アフリカの骨、縄文の骨—遙かラミダスを臨む」である。本展は大学（博物館）の特別展示にふさわしく、学術研究機関で行われている人類学研究とはどのようなものか、すなわち「人類学の研究そのもの」を展示で表現することに取り組んだ展覧会である。大学で行われている学術研究を社会に発信するミッションを持った施設として、「骨」がメインモチーフである人類学の研究をいかに効果的に伝えるかということに注力し、企画・製作した。本講義では普段はあまり知らされない企画、計画、デザイン、製作のプロセスを明らかにし、企画者の狙いや企画意図、コンセプトをどのように具体化させていったかを紹介する。展示は確固たる目的とメッセージを持ち、その伝達方法を最適化すれば、極めて力強い情報伝達のメディアとなる。そのケーススタディとして、展覧すべき骨などの標本をコアにしつつ、展示ならではの複合効果によって、「展示」がどのように学術・文化を翻訳するコミュニケーションの役割を演じたかなどについて講じる。

# 古版本の目録作成

—『稀観書の書誌記述』に沿って—

社会科学古典資料センター専門助手

床井 啓太郎

## 1. はじめに

一橋大学社会科学古典資料センターでは、1850年以前に出版された古版本およびメンガー文庫、ギールケ文庫、フランクリン文庫などの特殊文庫からなる7万5000冊余の貴重書群を所蔵しています。これらの資料は冊子体目録やカード目録で管理されているほか、国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録を通じて、電子媒体の目録整備が順次進められています。今回の講義ではこれら古版本の目録を作成する際のポイントを、特に英米目録規則第2版(AACR2)と『稀観書の書誌記述』の記述の違いに注意しながら確認していきたいと思います。

## 2. 目録規則

古典資料センターでは、古版本の目録作成時に主に以下の目録規則類を使用しています。

- ・『英米目録規則(第2版日本語版)』(AACR2) 東京, 日本図書館協会, 1982.
- ・『稀観書の書誌記述』 国立, 一橋大学社会科学古典資料センター, 1986. (一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11)
- ・Anglo-American cataloging rules. 2.ed., 1998 revision. Chicago, American Library Association, 1998.
- ・Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981.
- ・Descriptive cataloging of rare books. 2.ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991.
- ・Descriptive cataloging of rare materials (books). Washington, D.C., Library of Congress, 2007.
- ・『目録システムコーディングマニュアル』 東京, 国立情報学研究所.
- ・『目録情報の基準 第4版』 東京, 学術情報センター, 1999.

総合目録データベースに洋書の目録を登録する際には、『英米目録規則(第2版日本語版)』(AACR2)と『目録システムコーディングマニュアル』を使用しますが、センターでは西洋古版本に特有の事項を書誌記述に反映させるため、カード目録の時代からAACR2だけでなく『稀観書の書誌記述』を目録規則として用いてきました。

『稀観書の書誌記述』は、18世紀以前に印刷された出版物や、手刷り印刷本などの目録

作成に使用することを想定して、AACR2における初期刊本に関する規程(2.12-2.18)を拡張して作成された *Bibliographic description of rare books*. Washington, D.C., Library of Congress, 1981 の邦訳版です。この規則は現在までに2回改訂を重ねており、第2版が *Descriptive cataloging of rare books. 2<sup>nd</sup> ed.* Washington, D.C., Library of Congress, 1991、最新版が *Descriptive cataloging of rare materials (books)*. Washington, D.C., Library of Congress, 2007 です(それぞれタイトルが異なるので注意)。基本的に AACR2 に準じた内容ですが、細部で異なる部分や AACR2 との間で相反する規定もありますので、これらに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。以下『稀観書の書誌記述』に基づいて書誌を作成する際のポイントを具体的に見ていきます。

### 3. 目録作成

古典資料センター所蔵の *Lazari Bayfii Annotationes in legem II De captiuis & postliminio reuersis...*. Basileæ, Apud Hier. Frobenium, 1537. 【Franklin:2597】(図表1,2)を題材に、書誌作成時の注意点を考えます。(反転は『稀観書の書誌記述』の規程)

#### <TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができることが多い現代の出版物と異なり、古版本では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、課題資料のように「著者～の…」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。

\*1.1 “Lazari Bayfii” = 「ラザル・バイフの」: 書名に掛って著者名を表している。

→ 属格で掛っている場合タイトルと分離できない。

- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。

\*1.4 “Poftliminio” × “Postliminio” ○

- ・“I / J”、“U / V / W”の転記に注意する。(0H.)

\*1.7 “EIVSDEM” → “eiusdem”

- ・本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。(1B8.)

(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限って、縮約する。)

- ・責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)

(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は) ...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)

#### <ED>

- ・版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)

- ・別刷 (issues) または刷 (impressions) に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていても版表示として記載することができる。(2B2.)

(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報は ED フィールドに記録してはならない。)

#### <PUB>

- ・課題資料では出版者情報がタイトルページに無く、奥付に記載されている(図表 2)。15-16 世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されることが多い。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)

\*NOTE: Publisher statement from colophon

- ・出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実(先行する必要な語句とともに)によって転記する。(4C2.)

(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)

出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべてを記録する。(4C6.)

(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のもの順で、記録する。...2 番目以降は「選択」である。)

\*PUB: Apud Hier. Frobenium et Nic. Episcopium (PUB: Frobenius とはしない)

- ・ローマ数字の表記: M=1000, CIƆ=1000, D=500, IO=500, C=100, L=50, X=10, V=5

\*M D XXX VII=1537

- ・出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)

(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのまま記載する。)

- ・2 つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が 2 箇所以上あり、それらの地名が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

\*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・出版年または印刷年を日および月を含めて記載する。(4D1.)























